平成29年度公文書館企画展

中国四国地区
アーカイブズウィーク
第12回

県政顧問が見た五〇年前の鳥取県

会期：平成29年5月23日(火)～6月25日(日)
午前9時～午後5時
（会期中無休）

場所：鳥取県立公文書館
鳥取市尚徳町101

お問い合わせ：電話　0857-26-8160
電子メール　kobunsho@pref.tottori.lg.jp
ホームページ　http://www.pref.tottori.lg.jp/kobunsho

入場無料

昭和40（1965）年4月1日、5人の県政顧問が誕生する。足立正（境港市出身）、内海清温（倉吉市出身）、澤田廉三（岩美町出身）、田子富彦（米子市出身）、矢部貞治（鳥取市出身）。財界や外交、学界の最前線にいた彼らに、当時の郷里はどのように映っていたのだろうか。

大山（豪円山）での視察風景（昭和40年10月）

とっとり県民カレッジ連携講座　Tottori Prefectural Archives

県政顧問の始まり

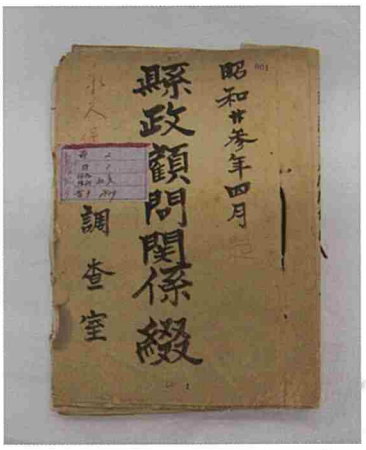
昭和23（1948）年４月１日、工学博士・内海清温が県政顧問に就任した。これが鳥取県の県政顧問の始まりである。ちなみに、西尾愛治がこの時の県知事であった。

内海清温は、東伯郡倉吉町大字円谷（現倉吉市円谷町）生まれで、米子中学校から東京帝国大学工科大学土木工学科に進む。卒業後、全国の河川改修、水利による電力・ダム開発等に関わった。

次の文は、内海を県政顧問に委嘱する際の「伺」である。

> 本県産業の開発振興を計り其の対策を樹立する為め工学博士内海清温氏を県政施策顧問に推すことは尤も有意義なことゝ考えられますので今度同博士を顧問に推薦し今後権威ある御指導を仰ぎ度いと思ひますが如何でしょうか。

県政顧問を設置する意図や目的を見ることができる。鳥取県は続けて、農学博士・橋本伝左ヱ門（埼玉県生まれ、同年10月８日就任）、財政経済の専門家・稲葉秀三（京都府生まれ、昭和30年10月８日就任）に県政顧問を委嘱した。



制度化される前の県政顧問に関する公文書綴り

昭和24年７月、鳥取県庁にて、「橋本（伝左ヱ門）博士を囲む懇談会」が開催された。橋本は、①二十世紀梨、木工等の特産物を生かすこと、②農業協同組合を推進すること、③大山原野の入植・開拓事業を着実に進めていくこと等を助言した。特に、大山の利用価値を高めるために、道路、電源、農業開拓、畜産、林業、農産加工、観光等を総合的に検討することを力説している。

県政顧問の制度化

県政顧問が制度化されたのは、石破知事時代（２期目）の昭和40年４月１日のことである。次の文は、同年２月定例鳥取県議会での土谷栄一県議の一般質問である。

> かって（ママ）本県には、西尾知事時代、いわゆる民選知事最初のころから、同様の趣旨において、二、三の県政顧問が置かれておったことを思い起こします。しかし、その後当時の県政顧問のかたがたが、いかなる経過で、どの知事の時代であったか、さっぱりわかりません（中略）鳥取県の県政顧問などという本県にとっては最高の機関であると思うが、それに委嘱する人々に対しては、明確なる規定をつくり、いわゆる制度として扱うべきであって、その職階的立場をも考慮に入れてされることが大切であろうと存じます。

前述したように、内海は西尾愛治知事時代に顧問に就任したが、昭和31年８月に辞任している。ちなみに、稲葉は昭和36年、橋本は昭和37年に辞任している。その理由は定かではないが、制度に不備があったことは想像に難くない。県政顧問の重要性を説く土谷県議は、規程に基づく顧問制度を作ることを求めたわけである。

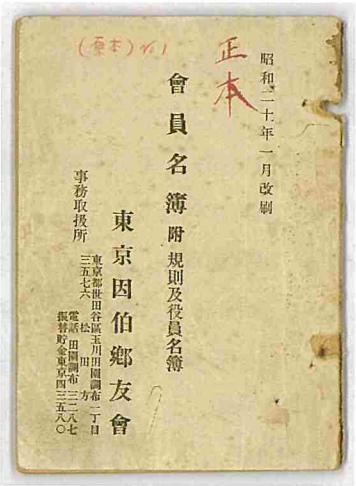
これを受けて鳥取県は、類似する制度を設けていた東京都や和歌山県の事例を参考にしながら、昭和40年４月１日付で鳥取県県政顧問設置規則（鳥取県規則第14号）を施行した。この規則における県政顧問の所掌事務は「県勢の進展を図るために特に必要な重要事項に関し、知事から委託された

事項について調査助言する。」（同規則第３条）とされている。

同日付で、足立正、内海清温、澤田廉三、田子富彦、矢部貞治の５名が県政顧問に就任した。内海へは再度の任命、残り４名は新規の任命であるが、この５名に共通していたのは、鳥取県出身者であること、東京鳥取県人会の会長等を務めていたことである。

東京鳥取県人会

東京鳥取県人会が東京因伯郷友会として発足したのは明治36（1903）年のことで、旧鳥取藩主池田家を継承した侯爵池田仲博を総裁とし、初代会長は奥田義人が務めた。東京鳥取県人会と名を変えたのは、第６代会長の田子富彦の時であるが、残存する『会員名簿』で確認する限り、改称は昭和38（1963）年前後のことと考えられる。この名簿では、田子が会長で、足立、内海、澤田、矢部の４氏は評議員を務めている。任期は２年間であった。



残存する最も古い『会員名簿』
（鳥取県東京本部所蔵）

昭和40年５月からは澤田が第７代会長に就任し、田子は名誉会長となっている。澤田は昭和45年に逝去するまで会長の任にあったが、その後を受けた第８代会長は内海である。鳥取県人会誌『梨花』の第２号（昭和41年９月10日発行）によると、当時の東京鳥取県人会の会員数は852名であり、同会の主要メンバーから県政顧問を選んだのは、在京する県人の政治力や人脈を最大限に活用する意図があったからであろう。

第１回県政顧問会議

澤田が鳥取県人会第７代会長就任にあたって企画したものとして、会誌『梨花』の刊行がある。その創刊号（昭和41年５月１日発行）に、第１回と第２回の県政顧問会議の概要が紹介されている。以下は、第１回の概要とそこに掲載された写真である。

第一回県政顧問会議
六月十七日　帝国ホテルにおいて
出席者　県政顧問の五氏、県側は石破知事、島田県議会議長、関口企画室長、前田企画室次長、木島教育長、平岩東京事務所長
会談内容　石破知事より、全国的な視野に立っておられる県政顧問の方々から、県のことについてご意見を承りたいとの挨拶があり、これに対して各顧問から、広域行政・交通（道路・鉄道）・工場誘致・観光・農業・文化財の保存など、当面する諸問題について、建設的かつ活発な意見が出された。

左奥から矢部貞治、澤田廉三、足立正、田子富彦。内海清温は田子の左隣に着席していた。

県政顧問の経歴

あだち　ただし
足立　正
（1883～1973）

日本商工会議所会頭、東京商工会議所会頭、（株）東京放送取締役社長

※1 上記の履歴は、本人の申告によるもので、『昭和四十年度 県政顧問関係綴』に収載される（以下も同じ）

会見郡境町（現境港市朝日町）生まれ。松江中学校（現松江北高校）から東京高等商業学校（現一橋大学）に進む。卒業後、三井物産の台北支店長であった藤原銀次郎が、足立の隣家から妻を迎えたという旧縁から三井物産に就職〔明治38（1905）年〕。藤原が王子製紙に異動するのに伴い足立も同社に移った。経営不振であった王子製紙は、第一次世界大戦を転機に発展し、足立は苫小牧工場長となり昭和17（1942）年には社長に就任した。戦後公職追放となるが、解除されると民間放送・ラジオ東京（現東京放送ホールディングス）の社長に就任。昭和32年には、東京商工会議所会頭と日本商工会議所会頭に就任。日本商工会議所会頭は12年間の長期にわたり、この間多くの団体の責任者となって、日本の経済発展に貢献した。

鳥取県政顧問には昭和48年３月までその任にあったが、多忙を極めた関係からか第１回と第６回の会議に参加したのみとなった。足立は、“財界の世話人“とも呼ばれる日本を代表する財界人であったが、その足立に県政顧問を委嘱したことが、県側にとっては大きな意味を持ったといえる。

うつみ　きよはる
内海　清温
（1890～1984）

工学博士、元電源開発（株）総裁、前総理府科学技術会議議員、総理府科学技術庁顧問、日本建設機械化協会会長、攻玉社短期大学名誉学長

東伯郡倉吉町大字円谷（現倉吉市円谷町）生まれ。米子中学校（現米子東高校）から第一高等学校を経て東京帝国大学工科大学土木工学科に進む。卒業後、内務省東京土木出張所に奉職〔大正４（1915）年〕。ダム建設に夢を託し、内務省を辞し朝鮮に渡るも建設中止となり帰国。電気化学工業（株）へ入社し、大淀川（宮崎県）水力発電所建設に従事した。その後、顧問技師（コンサルティング・エンジニア）を開業し、全国の自治体や電力会社、水道会社の顧問として活躍するとともに東大、早大、日大の講師として、水力発電工学の講義を行った。

日本軽金属（株）での富士川発電建設、日本発送電（株）建設局長等で活躍し、昭和31（1956）年から政府出資の電源開発（株）総裁となった。また、土木学会会長、科学技術庁顧問を歴任するなど、わが国科学技術界における重鎮であった。

県内視察を伴った第２回県政顧問会議の中では、①外国人旅行者に対応できる観光パンフレットを作成すること、②島根県とも連携した広域の観光ルートを作ること、③鉄工団地の将来計画として庶民住宅用の鉄骨を作ることを検討すること、④二十世紀梨の品種改良や運搬方法を検討すること、⑤農業高校の家庭科など女子教育機関の充実を図ること、など積極的な発言をしている。内海は、昭和23年から31年、40年から逝去する59年まで長期にわたって県政顧問を務めたことが特筆すべき点といえる。

※2 写真の撮影時期と典拠等
足立正（不明、紙の博物館蔵）、内海清温（昭和 32 年、当館所蔵）、澤田廉三・田子富彦（昭和 40 年、当館所蔵）、矢部貞治（昭和 41 年、『矢部貞治日記』）

さわだ　れんぞう
澤田　廉三
（ 1888～1970 ）

元国連大使、元外務省顧問、元日韓会談首席代表、日本ビルマ協会会長、東京鳥取県人会会長

岩井郡浦富村（現岩美町浦富）生まれ。鳥取県第一中学校（現鳥取西高校）から 第一高等学校を経て東京帝国大学法科大学フランス法律科に進む。卒業後、高等文官試験・外交科に合格し外交官補となる〔大正３（1914）年〕。海外赴任先は、フランスに始まりアルゼンチン、中国、イギリス、米国等に及んだ。米国では総領事、再赴任先のフランスでは大使を務めた。昭和13（1938）年にフランスから帰国して外務次官となる。一度免官となるが、復職してビルマ特命全権大使から再び外務次官となり、昭和20年５月まで戦争終結に向けて尽力した。昭和21年から27年まで公職追放となるが、解除後吉田茂の依頼を受けて、特命全権大使として在ニューヨーク国際連合日本政府代表となる（昭和28年３月～30年11月）。この間、オブザーバーとして「ロビー外交」等を通じて日本の国連復帰に尽力した。

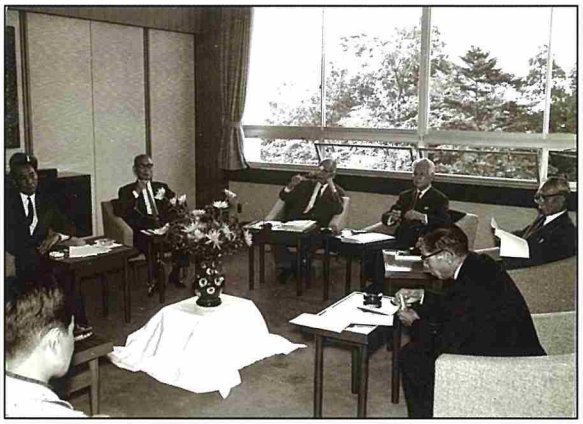
県政顧問会議の中では、「鳥取は世界の観光の地をそなえている」として、特に観光振興について積極的に発言している。例えば、県内の観光資源を海外にも積極的に紹介する「国際観光」を提唱し、そのための広報やローマ字表記の必要性を訴えている。また、観光開発には道路網の整備の重要性を指摘し、山陰海岸と大山環状道路等の道路網をつなぐ「パークウェイ」構想を提言している。澤田は、昭和45年暮れに亡くなるまで、８回開催された県政顧問会議すべてに出席している。

たご　とみひこ
田子　富彦
（ 1884～1983 ）

元（株）神戸製鋼所副社長、蒲田振興（株）取締役社長、神鋼機器工業（株）相談役、 東京鳥取県人会名誉会長

米子町車尾（現米子市車尾）の深田邸跡に生まれる。父は八頭郡長、気高郡長を歴任した田子義行。鳥取県第一中学校を経て東京外国語学校教員養成所英語科に進む。卒業後県立倉吉農学校（現倉吉農高）に奉職〔明治39（1906）年〕。以後県内外の中学校に勤務する。大正６（1917）年教職を辞し神戸製鋼に入社、昭和20年９月には副社長となった。昭和18年に操業を開始した神戸製鋼所上井工場（現神鋼機器工業株式会社）の相談役も務めた。

県政顧問会議では、①厚生福祉施設の充実を図ること、②職業訓練所の充実を図り質の良い労働力を生み出すこと、③農業高校を倉吉農業高校に一本化すること、④観光ルートの策定や標語の募集、東京大阪等への広報活動を行うこと、などに言及している。



県庁で開催された第２回県政顧問会議の様子。右手前から反時計回りに、石破知事、内海、澤田、田子、矢部、関口企画室長。

やべ　さだじ
矢部　貞治
（ 1902～1967 ）

政治学博士、元東京帝国大学法学部教授、元拓殖大学総長、政治評論家

気高郡美穂村大字向国安（現鳥取市向国安）生まれ。鳥取県第一中学校から第一高等学校を経て東京帝国大学法学部政治科に進む。昭和３（1928）年、同帝国大学の助教授となる。昭和10年文部省在外研究員として米国、イギリス、ドイツ、フランスに留学。昭和13年から近衛文麿の「昭和研究会」に参加し、外交部の会長を務めた。戦後東京帝国大学教授を辞任し公職からしばらく距離を置くが、昭和27年に早稲田大学大学院講師に就職し、昭和30年には拓殖大学総長兼教授となった。昭和36年憲法調査会海外調査団団長として北中南米８カ国に出張。昭和39年拓殖大学総長を辞任し、以後は政治評論家として活躍した。

県政顧問会議の中では、「裏大山は景観が格別よいので一層のＰＲが重要」であると説き、そのためには、鍵掛峠に展望台を設置し、御机ー鏡ヶ成間の道路改修を早期に進めるよう意見を述べている。

「矢部貞治日記」にみる旅

「矢部貞治日記」（以下、「日記」）は、日本を代表する政治学者矢部貞治が、第一高等学校生だった大正10（1921）年３月25日から死去する３日前の昭和42（1967）年５月４日までの46年間にわたって書き残したものである。「日記」の原本は、衆議院憲政記念館に寄託されているが、昭和12年から昭和42年までの「日記」は、読売新聞社から『矢部貞治日記』（全４巻）として刊行されている。戦前・戦中期の出来事が克明に記されており、刊行時は「昭和史研究に必須の第一級資料」と評された。「日記」は、平易な文体で書かれており、その内容は、世相や政治論評から日常生活にも及んでいる。

鳥取についても多くの記述が見られ、毎年夏に帰省していたこと、鳥取市内の小銭屋を定宿としていたこと、カニやカレイなどの特産品が送られてきたこと、鳥取文化会※3の会長を務めたことなど、鳥取への深い愛着が「日記」からうかがえる。郷里への思いと県政顧問就任は無関係ではない。

『矢部貞治日記』（全４巻）県政顧問に関する記述は、最終巻「躑躅の巻」に収載される。

さて、「日記」の中に県政顧問のことが最初に登場するのは、昭和40（1965）年２月14日のことである。

> 古井がやってきて、（中略）鳥取の石破※4知事が、県政顧問になってくれということ。これもよかろうといっておく。

古井とは、鳥取県第一中学校で同級だった衆議院議員古井喜実のことで、矢部とは親しい間柄であった。古井は、石破知事から矢部への県政顧問就任の打診を頼まれたわけで、内諾を得た石破知事は、３月22日にあらためて矢部に依頼した。

> 鳥取県知事の石破君から電話で、四月から県政顧問というものになってくれという。古井からも話があったことで承諾した。足立、田

※3 鳥取文化会は、昭和37年に鳥取県出身の芸術家を支援する目的で設立され、矢部は会長を務めた。
※4 『矢部貞治日記』は「不破」となっているが、これは誤りである。

子、沢田(ママ)、内海の諸家といっしょの由。

県政顧問就任の裏話である。他の４名の名前が出てくるので、矢部への依頼は最後だったことが分かる。矢部は、生前に開催された４回の県政顧問会議すべてに出席し、そのことを「日記」にも書いている。特にページを割いたのが昭和40年10月に開催された第２回目の会議である。

この会議は、鳥取で開催され重要箇所を巡る視察が組み込まれていた。この会議には足立を除く４名が出席したが、この間の記述は「鳥取県（県政顧問）行」と題され、10月10日から14日に及んでいる。

10日は東京から新幹線「ひかり」、急行「白兎」を乗り継いで上井（現倉吉）駅着、宿泊は三朝温泉（岩崎）であった。翌11日、三朝から上井、田後（現湯梨浜町田後）を経由して国道９号線に出て西へ向かい、大山有料道路（現県道24号線）を経由して最初の目的地・大山に入った。

> 枡水原で眺望をほしいままにしてから一の沢、二の沢、三の沢と進む。立派な道路になっており、裏側から見る大山の南壁の冷酷なきびしい姿に打たれた。（中略）三の沢の少し先に鍵掛峠というがあり、ここから見る南壁の景色が一番よい。ここからこんど御机まで、十キロの舗装道路ができ、先日開通したというので、御机まで行ってみた。むかし中学生の時、関金から御机を経て大山登山をやったことを想い出した。これは環状道路というので、将来鏡が成、さらに関金の方まで延びる予定の由。

大山周辺が視察の一番目であったというのは、鳥取県西部の観光にとって欠くことのできない場所であったことの表れである。またおよそ５カ月前に同所で全国植樹祭が開催されたことを契機に、道路網の整備が進んだことも「日記」からうかがえる。その後、一行は境港外港、木工団地（境港市）、鉄工団地（米子市）を視察して皆生温泉（東光園）に宿泊した。

翌12日、国道９号線を東へ進み※5、湖山で鳥取大学の建設現場を見てから鳥取砂丘へ向かい、その後鳥取県庁に入った。

鳥取ゴルフクラブから見た砂丘

> 砂丘に行く。見違えるほど良い舗装道路になっている。カントリー・クラブの屋上から砂丘を見た。一部の植林を除去するがよいという点で一致した。（中略）一時半から三時半過ぎまで知事や各部長と会議。ちかちか中身のある話が出た。それから四時半過ぎまで記者会見。さらにそれからＮＨＫに行き、僕の司会で二十分の座談※6。

ＮＨＫでの撮影を終えると一行は、そのまま鳥取市内の宿所（小銭屋）に向かった。

翌13日は、移動日であったが、矢部の場合は来客対応の後、三代寺（現鳥取市国府町）で松茸狩りを楽しみ、さらに八頭高校で講演を行った。

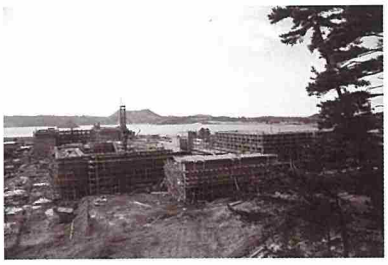
> 大きな高校で、本校に二千八十人、分校（若桜）に二百人余ということであった。校長は前に鳥取の図書館長をしていた文学博士の山本嘉将君。二時過ぎから、その二千人余の生徒がぎっしりとつまった講堂で、「良識ある公民」という話しを、一時間ほどした。拍手の中を辞去。

講演の後、小銭屋に再び戻り、夕方の寝台列車「出雲」に乗り込み、翌14日朝東京に着いた。車中泊を含め４泊５日の視察旅行であった。

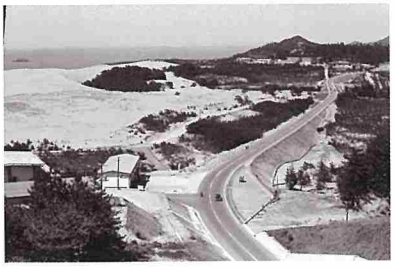
※5 予定されていた安田地区の農業構造改善事業（旧赤碕町）は時間の都合で取り止めとなり、北条の畑地かんがいの視察は、取水口を見ただけとなった。
※6 この時の映像はＮＨＫには残されていないという。

県政顧問視察行程図・写真

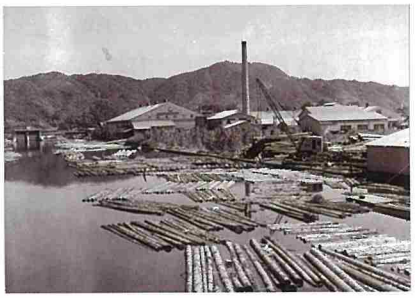
境港　外港地区



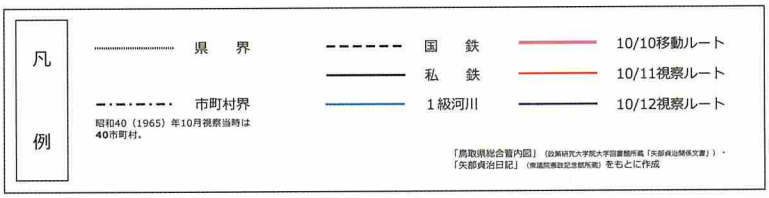
建設中の鳥取大学



舗装された「砂丘道路」



境港　木工団地



米子　鉄工団地

大山（豪円山）

紅葉が映える大山

協力者一覧

□ 機関・団体（五十音順・敬称略）

エリザベス・サンダース・ホーム、株式会社建設技術研究所、紙の博物館、観水庭こぜにや、
協同組合米子鉄工センター、境港市史編さん室、衆議院憲政記念館、政策研究大学院大学、東光園、鳥取県東京本部

□ 個人（五十音順・敬称略）

足立壽惠雄、石谷尚子、遠藤隆司、面谷明俊、筧邦男、永美護郎、油浅郁夫

平成 29（2017）年 5 月 23 日 発行
編 集・発 行　鳥取県立公文書館　電話 0857-26-8160 ﾌｧｸｼﾐﾘ 0857-22-3977
ホームページ　http://www.pref.tottori.lg.jp/kobunsho